

くらしとかさねる文学教材集

ねらい

○人権教育のカリキュラムを学校体制で作成する場合、固定的な題材を組み込んだ年間計画を作成する場合が多い。しかし、子どもの実態や学級の課題によって、適切な教材を選び実践することが必要になる。子どものくらしの中にある問題を、文学教材の登場人物と重ねて考えるさせることにより、教材の中の問題が、他人事でない自分の問題として考えることができるようになる。そのための文学教材集である。

対象

○全学年

展開例

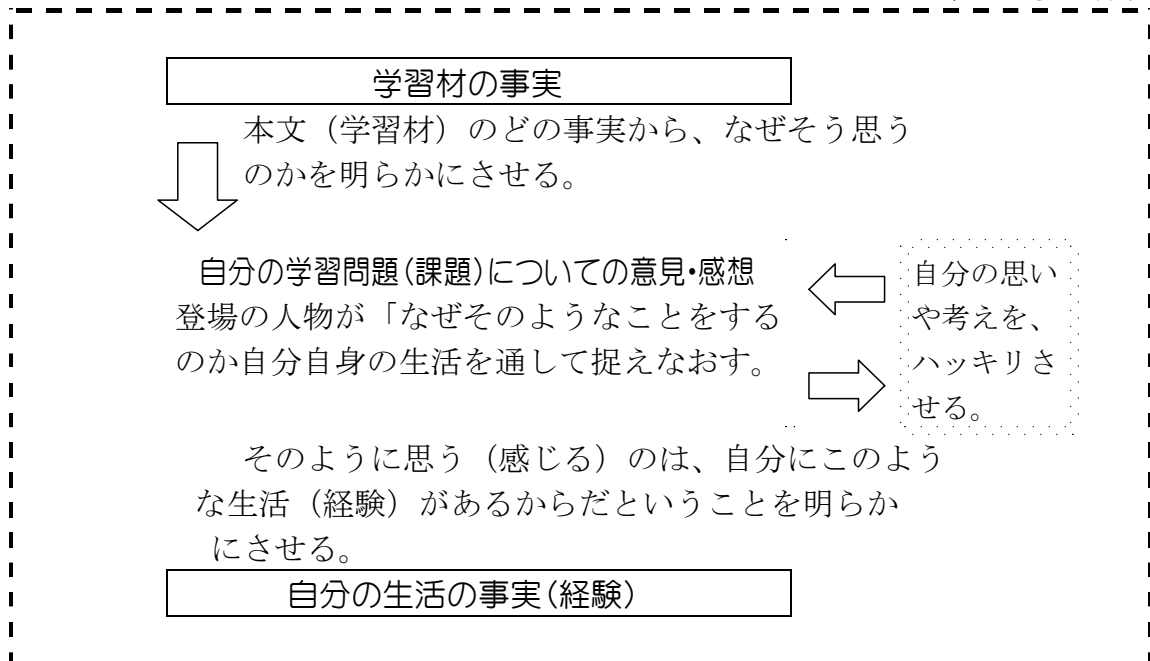
① 学習材との出会い（初めの感想を書く）

- ・学習材（文章の事実）で共感したところ。
- ・疑問に思ったところ。
- ・子どもたちとの間で、とらえ（登場人物などへの思い・評価）にズレが見られたところ。（座席表などでとらえる）

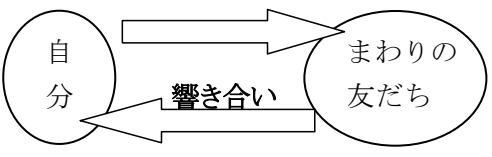
学習問題（課題）の設定



② 自分との対話（思考）…自分の生活とかかわらせ学習材の事実を捉えていく。
（子どもの活動）



③ なかまとの対話 …子どもと子どもをむすびつける。

 <p style="text-align: center;">友だちの意見に 自分の生活を重ねて 反応できる。</p>	<p>子どもたちは、授業で、自分とちがう感じ方・考え方に会う。</p> <p>※一問一答のように、教員が望んでいる答えを察知した子が、活躍する場でない。</p>
<p>学びの共同体である</p> <ul style="list-style-type: none"> ・安心して話ができる雰囲気（まわりが受け入れる空気）をつくる。 ・友だちとの話し合いの中で、自分のくらしを語り、友だちのくらしや願いを知る中から、教材の読みを深める。 ・他人事でない、自分の問題として考えることができるようになる。 	

文学教材一覧表

①子どものくらしをかさねる低学年教材一覧

教材名 (作者・著作者)	作品の概要・指導のねらい
きつねの おきやくさま (あまんきみこ) 絵本 出典：サンリード	無邪気なまでにきつねを信用するひよこ。ひよこの期待を裏切らないようにがんばるきつね。きつねの心の移り変わりの様子を絵や文章から感じたり読み取ったりしながら、おおかみと闘うきつねの心に勇気がわいてきたのはなぜか、などについて考えさせたい。
ひとりぼっちの らいおん (長野博一) 出典：『にんげん ひと いのち』	友だちがほしいと思うライオンと、ライオンであるということだけで逃げてしまう動物たち。それぞれの動物たちのつぶやきを通して、自分たちの身の周りに同じようなことはないのかを考えさせ、ありのままの自分でいいのだということに気づかせたい。
ありがとう ともだち (内田麟太郎) 絵本 出典：偕成社	大好きなキツネに見栄をはるためにうそをついてしまったオオカミ。そんな自分がいやになり、キツネにあたってしまうオオカミ。でも、そのようなオオカミを許してくれるキツネ。大切な友だちだからこそケンカをしたり、許し合ったりできるのではないか。自分と友だちとの関係を見つめさせたい。

<p>ともだちや (内田麟太郎) 絵本 出典：偕成社</p>	<p>友だちがほしくて「ともだちや」を始めたキツネだったが、いやな思いを経験する。しかし、その後オオカミと出会って楽しく遊んだ後に、キツネが遊んだお代を要求した時に、おおかみが「おまえは、友だちからお金をとるのか」とおこりだす。自分たちの生活をふり返りながら、本当の友だちとは、どんな関係なのかを考えさせたい。</p>
<p>おかあさんのしごと (南江津子) 出典：『にんげん ひと いのち』</p>	<p>かずゆきの母は、ホルモンを売る店をしている。クラスでおうちの人の仕事を話した日、聞いていたさゆりが「きもちわるいなあ。」とつぶやいた。いっしゅん戸惑ったかずゆきだが「うちのホルモンおいしいでえ。」ときっぱり返す。自分や自分の家族と登場人物を重ねながら読み、いきいきと自分や自分の家族のことを語らせたい。</p>
<p>オオカミクン (グレゴワール・ソロタレフ) 絵本 出典：ポプラ社</p>	<p>オオカミとうさぎのトムは仲良しだったが、こわいごっこをして遊んだことで、オオカミはトムをこわがらせてしまう。しかし、オオカミも自分と同じ体験をしたことにより、トムの気持ちをわかることができた。オオカミとトムの気持ちを考えることを通して、友だちとの関係をふり返り、よりよい関わり合いについて考えさせる。</p>
<p>なんやななちゃんなきべそしゅんちゃん (灰谷健次郎) 絵本 出典：</p>	<p>おてんばであるが、豊かな感性とやさしさを持つななちゃん。同じクラスの泣き虫っ子しゅんちゃんは、そんなななちゃんに影響を受けて勇気を出していく。登場人物に自分を重ね、自分や友だちを今まで以上に理解させる。</p>
<p>お手紙 (アーノルド・ローベル) 教科書(光村図書)</p>	<p>お手紙が届くまでの時間を、とつても幸せな気持ちで待ち続けるふたり。その場面ごとの様子を想像しながらゆったりと待つことの幸せな気分を感じさせたい。また、自分たちにもそんな経験がなかったか話し合いながら、自分にとって幸せと感じる時間について考えさせたい。</p>
<p>あのととき すきになったよ (薫くみこ) 絵本 出典：教育画劇 みんなのえほん</p>	<p>しっこさんは、いつもおこったみたいな顔をしている。しっこさんはよくおもらしをするので、みんなにしっこさんとよばれている。しっこさんは、ときどきわたしのじゃまをする。ちっとも好きじゃないのに、好きになってきたのは、なんでかなあ。わたしとしっこさんが仲よくなっていく様子を、自分たちの友だち関係と重ねながら、読みとらせていきたい。</p>

さるとかに (水平社新聞より) なかま	ひとりぼっちのさるは、さみしさをまぎらわせるために、石をなげて遊んでいる。それがカニにあたり、大ケガをする。「やめてください。」とカニたちは抗議するにもかかわらず、サルは、「こんなことぐらい」と言って、やめようとしな。相手のことを考えずに石を投げ続けるサルや、力を合わせて正しいことを訴えていくカニの心情を読み、自分たちが学級集団の中で正しいことが言えているなかまであるかどうかを点検させたい。
さきちゃんと ぼくとイチゴ なかま	「なにをいってもきいてくれないし、さきちゃんのいっていることがわからない」ので、「さきちゃんがきらいだ」と言っていたぼくが、最後に「さきちゃんをすきかもしれない」という。このぼくの心の動きを考えさせたい。そして、ぼくを自分自身に置き換え、自分の学級と重ねて考えさせたい。
たろうのともだち (むらやまけいこ) 絵本 出典：福音館書店	自分より弱そうなものには、「けらいになれ」と言い、強そうなものには、「こんにちは」と言う動物たちに、たろうは「けらいなんて、ぼくはいや」「それなら、みんな友だちになったら…」と言い切る。力で友だち関係をつくっていくことのおかしさを自分たちの生活と重ねて考えさせたい。

②子どものくらしをかさねる中学年教材一覧

ともだちくるかな (内田麟太郎) 絵本 出典：偕成社	自分の誕生日を一日はやくまちがえて、キツネを待つオオカミ。キツネが来ないことを理由に「こころなんか、いらぬぞーっ」と心をはき出してしま。次の日、ケーキを持ってやってきたキツネと共に、心を取りもどしていく。勘違いして、自分を失ってしまった経験と重ね合わせ、オオカミやキツネの気持ちを読み取らせ、本当の友だちとは何かを考えさせたい。
あしたもともだち (内田麟太郎) 絵本 出典：偕成社	キツネは仲良しのオオカミが遊んでくれなくなり、しょんぼりしていた。しかし、そのわけがケガをしたクマさんの看病のせいだとわかり、キツネはますますオオカミが好きになる。登場人物の言動から相手を思いやる心の素晴らしさを感じさせたい。
けんかのきもち (柴田愛子) 絵本 出典：ポプラ社	けんかを通して、以前にもまして友だちとのつながりが深まっていく物語。こうたとけんかをして負けたたいが、こうたやまわりの人々の働きかけによって、けんかのきもちをおさめていく。自分たちがけんかをした時の経験を、物語の中の主人公の気持ちに重ねることにより、友だちとの心のかぎについて考えさせたい。

<p>ごめんねともだち (内田麟太郎) 絵本 出典：偕成社</p>	<p>ゲームに負け続け、くやしきのあまり、キツネに「いんちきは、このうちから出て行け」と言ってしまったオオカミ。言ってしまった手前、友だちのキツネに素直にあやまれないオオカミ。自分の生活をふり返り、素直にあやまらなかった経験を、オオカミに重ねて考え、思いを相手に伝えることの大切さを考えさせたい。</p>
<p>ごろはちだいまょうじん (中川正文) 絵本 出典：福音館書店</p>	<p>ふだんはいたずら者とされている「ごろはち」であるが、ラストでは、村人を守るために汽車に飛び込む「ごろはち」の決心や行動について考えさせたい。</p>
<p>やまんばのにしき (まつたにみよこ) 絵本 出典：ポプラ社</p>	<p>おそろしいと思われていたやまんばが実は豪快でおおらかであったことと村人がひたすらやまんばを恐れていることを対比させ、登場人物の気持ちを考えさせる。外見だけで人を判断していることはないか、自分の生活をふりかえって考えさせたい。</p>
<p>ぜっこう (柴田愛子) 絵本 出典：ポプラ社</p>	<p>二人の男の子がケンカをし、絶交し、それが解決するまでの心の揺れを読み取らせる。自分の経験と重ねて話し合うことにより、自分の思いを話す意味を考えさせる。</p>
<p>島ひきおに (山下明生) なかま</p>	<p>鬼であることで、排除されつづける鬼。それでも友を求めて海を歩き続ける鬼。村人の言葉、鬼の言葉から、自分たちの生活と重なるところを点検しながら読ませたい。</p>
<p>あらしのよるに (木村裕一) 絵本 出典：講談社</p>	<p>真っ暗な小屋でヤギとオオカミがお互いそれと知らないまま知り合った。ドキドキしながら読み進めるうちに、この出会いが本当に素晴らしいことだと気づかせる。言葉だけで心がつながっていくことに気づかせたい。</p>
<p>みみずのかんたろう (田島征彦) 絵本 出典：くもん出版</p>	<p>気持ち悪いヤツと言われてくやしがついていたみみずのかんたろうが、「みんながそれぞれ違った形でいろんなことをするから山の中が楽しいのさ」と気づく話である。落ち込んでいるかんたろうの心をやわらかくしてくれたのは友だちであったことを読み取りながら、自分とちがったところを認めていける気持ちを持つことの大切さに気づかせる。</p>
<p>ピッピラピのピー (かわのひでただ) 障害児教育創作教材 あっ、なんだ</p>	<p>山川君のクラスでは、学芸会に合奏をすることになりました。しかし、山本君は、ちゃんと楽器を演奏してくれません。そこで、山本君のレコーダーにテープをはって音が出ないようにすればいいという意見が出て、クラスで話し合うことになりました。</p> <p>一人ひとりみんなが主人公であるクラスというのは…どんなクラス？自分たちのクラスの問題と重ねて考えさせたい。</p>

<p>さっちゃんの まほうの手 (たばたせいいち) 絵本</p>	<p>さっちゃんのクラスでは、ままごと遊びがはやっています。そこで、さっちゃんはお母さん役をやりたいと希望するのですが、友だちに「さっちゃんは おかあさんになれないよ。だって、てのないおかあさんなんてへんだもん。」と言われて教室を飛び出してしまいます。</p> <p>さっちゃんのおもい、さっちゃんのまわりの人々のおもいを自分のクラスや自分の家族と重ねながら考えさせたい。</p>
<p>ごんぎつね (新美南吉) 教科書(光村図書)</p>	<p>ひとりぼっちのごんぎつねは、いたずらばかりしている。ある兵十がとったウナギを川に放り込んでしまう。しばらくして、兵十のおっかあの葬式を見たごんは、ウナギを放り込んだことを悔やみ、つぐないに兵十にクリやまったけを運ぶ。しかし、そんなごんの思いは、兵十には伝わらない。</p> <p>友だちと心が通じ合うとは、どのようなことか、自分たちの経験とかさねて考えさせたい。</p>

③子どものくらしをかさねる高学年教材一覧

<p>ぼくのお姉さん (丘修三) 出典：偕成社</p>	<p>ダウン症の姉がある日、作業所で働いた初めての給料で家族にごちそうをしてくれる。弟の正一は、そのことに勇気を得て、姉のことを題材に作文を書き始める。はじめは「障害」を持つ姉をうとましく思っていた正一だが、レストランでの一件から心の成長をとげていく正一の姿を、自分の中にあるマイナス感情を乗り越えていく経験と重ねて考えさせたい。</p>
<p>歯型 (丘修三) 出典：偕成社</p>	<p>ぼくと一郎としげるの3人が、たまたま出会った「あいつ」に足をかけ、こけるかどうかでジュースを賭けるゲームを繰り返していた。ある日、逃げた「あいつ」を追いかけて3人で暴力を加えた。その時、「あいつ」は、狂ったようにしげるのふくらはぎを噛んで抵抗した。しげるは、大けがをした。それは理由もなく「あいつ」が噛んだことにした。「あいつ」は、言葉を話すことができないから、自分たちのやっていたことが隠しきれなかったからである。しかし、しげるの歯型を見るたびに、ウソをついた苦しい気持ちがこみ上げてくる。登場人物の気持ちに迫っていく中で、自分や友だちの関係と重ねて読ませしていきたい。</p>
<p>夕焼け雲の下 (川崎大治) 文学読本はぐるま</p>	<p>末治・辰・庄太の三人の人間関係を描いた作品である。末治は庄太のいいなりであり、辰は、末治と庄太にバカにされる存在である。しかし、ラストの辰の立ち上がりの場面で、三人の人間関係は一変する。三人の人間関係を学級の友だち関係に置き換え、自分たちの友だち関係を振りかえらせ、人と人とは信頼の関係によってつながっていなければならないということを考えさせたい。</p>

しばてん (田島征三) なかま	村人たちがその強さから化け物と噂して村から追い出した太郎が、飢饉のために起こった一揆に荷担してくれる。その太郎を、自分の身が危うくなると、犯人として役人に引き渡してしまう身勝手な村人たちを、自分と重ねて読み取らせ、しばてんに起こる悲劇の真の原因について考えさせたい。
さかえ荘物語 「風にふかれて」 より (丘修二)	さかえ荘に引っ越してきた「障害」のあるタチバナさんと住民との間に起こる様々な出来事が、じゅんという少年の目を通して語られていく作品である。「障害」のある人たちとどうかかわっていくのかを越え、「人と人がつながるといこと」「自分はどうか生きるのか」ということを、子どもたちと考えていきたい。
放つたれ牛の辰 (さねとうあきら) 新書にんげん 『いまようやく ここに立って』	乱暴者で村のやっかいものである辰治と辰治のことを‘放つたれ牛’と、うとましくあつかう村人たちとのかかわりを描いている。戦争の時代、辰治は特攻隊に志願するが、戦死しないでもどってくる辰治を、村の人たちは‘ひきょうもの’とバカにし、辰治の父や母も、村から追いやってしまう。戦争からかえった辰治も村にいられなくて、谷で木こりとともに生活する。そして、谷に道を通すために、谷の宝である千本杉が切り倒されそうになる時、辰治は命をはって、千年杉を守る。物語の中での辰治の心の変化や、村人との関係を、自分たちのくらしと重ねて読ませたい。
物語 洩染め一揆 (川元祥一) にんげん高学年	江戸時代末期、岡山藩が出した儉約令が発端となって起こった強訴を題材とした物語である。厳しい差別の中にあっても誇りを持って生きている村人が、自らの存在と誇りをかけ団結して、圧政に立ち向かっていった。この村人たちの姿を、自分たちの生活と重ね、権利を守るため、大切にしなければならないことについて考えさせたい。
おらたちにや 口はねえだに (松谷みよ子) 旧なかま	厳しい封建制度のもと、必死で生きている農民の親子にふりかかる悲劇を情感豊かな描写で描かれている。主人公の心情を豊かに読み取り、固く口を閉ざすことでしか抵抗できない姿から、社会の不合理的矛盾を見抜く感性を育てたい。
花のき村と盗人たち (新美南吉) 出典：小峰書店	花のき村にやってきた盗人のかしらに、そこで出会う村人たちの人を信じる心にふれ、涙を流す。そして、これまで、自分たちがやっていたことを悔いる。かしらの心情を、自分たちの体験と重ねながら読ませたい。